

## 二十歳のころ 橋爪大三郎にきく

立花隆ゼミ『調べて書く、発信する』インタビュー集  
二十歳のころ <http://matsuda.c.u-tokyo.ac.jp/~ctakasi/hatachi/>  
<http://matsuda.c.u-tokyo.ac.jp/~ctakasi/hatachi/hasizume.html> より

平智之『松下政経塾と「中田人脈」の研究(補論)03-7-24』

[1]

<http://satou-labo.sci.yokohama-cu.ac.jp/030724taira.htm> 参照

## 橋爪大三郎にきく



岸本涉 佐藤治彦 佐藤陽子 田辺昌紀 \*中沢佳子 長谷川一郎 若原拓哉

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう)

一九四八年十月二十一日生まれ。東京大学文学部社会学科卒業後、同大学院社会学研究科社会学科専攻博士課程修了。現在東京工業大学の教授をしている。氏は学生時代から、構造主義をふまえた「言語派社会学」の樹立を目指して執筆を続け、性・言語・権力の三つを説明原理とする「記号空間論」の構想を展開した。著書に、「言語ゲームと社会理論：ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン」「民主主義は最高の政治制度である」など多数あり、新聞、テレビでも活躍中である。

学者である前に、一人の人間としての形をつくったであろう、若き日の話を伺いに期待と緊張の入り交じった思いで、九月十七日、午後一時に東工大にある橋爪氏の研究室に赴いた。氏は、「忙しいから」とおっしゃりながらも二時間に渡って話をしてく

ださった。

## 高校時代 社会学への目覚め

いつごろ、どのようなきっかけで社会学をやろうと決意したのですか？

高校生のときに、理系に進もうか文系に進もうか迷ったんです。ちょうど父親が定年になったので、早めに就職したほうがいいのかもしれないなあ、とも思っていましたね。で、当時は高度経済成長の真っ最中でしたから草木も理系になびいていたわけです。それで、少しそういう本も読んでみたのだけれどいま一つ自分に向いていないように思われた。特に理系が嫌いだったのではないのだけれど、好きでもなかった。同級生の中には好きで好きでしょうがないやつもいて、そういう連中の好きさかげんを見ると、これは彼らに任せておいたほうがいいんじゃないのかなと思ったんです。そのころ私は社会科は好きだったし、できたから、そっちの方が向いているなという気がして、ほんとうに向いているかどうか確かめてみたんです。確かめるというのは、図書館に行って片っ端から本を読んでみた。...開架式の図書館だったんですけれどもずうっと見ていくと社会学なんていうのがあった。そのころ私は社会学なんていうのがあるとは知りませんでしたから、ああこんな学問もあるのか、と思いましたよね。その隣に社会心理学というのがあって、その隣には心理学っていうのがある...というふうに、本棚をずうっと順々に片っ端から見ていったんです。それで、社会学のところをみたら、まあまあおもしろかったのと、これなら確実に自分でもできるという気がしたんですね。

高校はどちらですか？

開成高校です。といっても、そのころは都立日比谷に落ちた人が受けるところでしたから、たいしたことはないんですが。そのころ僕は、自分のことを他人のように外側から見てみたいと思っていた。ほら、高校生ぐらいになると本が読めるようになるから知識が広がるでしょう。だけど実体験としては、学校と家と、せいぜい盛り場と、3角形で往復するぐらいしかないから、ちっとも広がらない。そうすると体験を通さないで、情報として、あるいは知識として知っていることは多いけれども、実際にそれを考えていく上での手掛かりとなる体験や基盤がないから頭でっかちになってしまうんです。どう頭でっかちになるかは人によりますけどね。理系人間になったり、オタク人間になったり。でも私の場合は自意識過剰になるタイプで、自分のことが気になるわけです。けど、自意識というのはいちっとも広がっていかない。自分のことを考えても、自分のことを考えている自分が意識されるだけです。だから、別の何かが必要なわけです。その点、社会学は一人ひとりの違いを相対的に無視して、全体としてどういう現象が起こるのを見る学問ですから、高校のときに多少自意識過剰だった私としてはちょうどいいと思った。自意識過剰といっても、文学とかやっているような、自意識ばかりで、社会のことなどどうでもいってというような連中とは距離をおいていました。とはいえ、政治や経済をやっているような人からすればずっと文学に近かったのでしょうか。そういうわけで社会学をやろうと決めたんですね。

## 駒場時代全共闘との出会い

### I 勉学

一九六七年に東京大学に入学されたわけですが、駒場時代にはよく勉強なされたんですか？

一応社会学やろうと思って大学に入ったわけでしょ。で、入ってみたら社会学は本郷にあるわけですから、駒場の社会学はあんまりおもしろくなかった。それでも、初めの半年ぐらいは真面目にやってきました。高校のときみたいに決まった時間に教室に行き講義を受けてきちんとノートとったり、単語帳作ったりしてました。それプラスいろいろなことをするのが大学だと思ってましたから。予習復習をして、先生の間違ひを見つけたりもしました。それは、数式の定義で非常に重要な所だったから、誰か指摘しないといけないわけですよ。でも誰も指摘しないから、どうやら皆おとなしく聞いてノートとってるだけで中身はどうでもいいと思っているんだなあ、と気づきはじめてたんですね。試験にしても、ばっちり計算や式の展開など準備して臨んだのに「今回の講義の感想を述べよ。」という問題一題だけだったりして、すっかり頭にきてしまっただけ。それに、学生たちが関心持っていることと授業の内容とがほとんど何の関係もなかったし、この授業を受け続けていたらいずれは学生が切実に関心を持っていることとつながってくるんだぞ、という予感さえもしなかった。授業に出なくても単位が取れると分かったので、一年生の後半からは学校に出るのをやめてしまいました。そのあとストライキになって今度は授業の方がなくなってしまったから、結局四年間全部合計して一年ちょっとしか出ていないんじゃないのかなあ。

授業には出ていなかったけれども、本は読んでましたね。本読んでないと他の人と話が合いませんから。クラスに入ると後ろの黒板に「読書会やります」というようなのがベタベタはってあるんです。それに参加したりもししていました。だいたいマルクス主義系統の読書会が多かったのですが、フーコー(\*1)とかアルチュセール(\*2)ってというのがいるって聞けばそういうのをかじってみたりする。友達にサルトルに詳しいのがいれば、サルトルを読み...、民青の人はレーニンに詳しいですから、そういうのを読んでる連中もいる、というふうに、ざーっとみんなで読んでいましたね。

**東大に入ってみて、周りの同級生に対してはどういう感想を持たれましたか？**

そうですねえ...。最初につき合った連中は文三の同級生だったんですけども、文三っていうのは大したことないんですよ、だいたい。で、文一の連中は文一であることを鼻にかけてるやつが多くて。それから理系の人たちは、やっぱり勉強が忙しすぎて理系人間になってしまっていたから、これはあかん、みたいな。だからあんまりおもしろくないと思っていました。

## II 演劇

**授業に出なくなって、何をしたらしたんですか？**

まあ、東大の試験が済んだあといろいろと考えましてね。私は、中学3年のときから大学に合格する今までずっと勉強ばかりしてきた。受験勉強をやり過ぎて、自分の時間が持てなかった。で、どうすればいいかなあと考えて、今までと反対のことをやろうと思ったんです。それで、芝居とか演劇は多分受験勉強とは反対のことだろうと考えて、そういうのをやろう、と。で、当時駒場にあった数少ない劇団の一つに接触しましてね。秋に芝居をやるというんでそれに入れてもらった。その劇団の人に「稽古は何時から何時までなんですか？」って聞いたら「午後六時から終電までやる。」とか言うし、「公演の時に授業が重なったらどうするんですか。」って聞いたら「当然授業は出ないのである。」とかなんとか言うから、ああ、そういうもんなのかと思ひましてね。公演に向けて忙しくなったこともあって授業は体操以外はほとんど出ませ

んでした。

その演劇について、もう少し詳しく教えてくださいませんか？

当時、劇団駒場というのがあったんです。それは由緒と伝統のある劇団だったんですけども、二年ぐらい上で留年してた人が「前衛劇団に作りかえる」とか言って先輩を追い出して前衛劇団に衣替えしてしまった。私はその由緒と伝統ある劇団の最後の公演を見に行き、これはいいなと思って訪ねていって見たらもうまるで違った劇団にかわっていた。でもほかになかったんでそこに入りました。もう一つ演劇研究会というのも見に行ったのですが、なんか暗くて左翼系の劇団だった。そんな所にいたらますます自意識過剰に凝り固まる、これではどうしようもないな、と思ってそちらはやめときました。

### 川全共闘

橋爪氏が教養学部（駒場）時代を過ごした一九六七、六八年というのはちょうど学生運動が盛り上がっていたころである。東京大学においても本郷の医学部のストライキを皮切りとして「東大全共闘」の結成、安田講堂の占拠、機動隊の導入、安田講堂の陥落、そして東京大学入試の中止、という一連の事件への幕開けのころでもあった。

#### 1 演劇から全共闘へ

実際にデモやストライキにはどれくらい参加したのですか？

ちょうど周りで全共闘運動が盛んになっていたところに僕は演劇もやっていたわけだ。演劇と運動との両立は、大変だった。それでも芝居の稽古をして一年生の後半から二年の六月ごろにかけて二回ほど舞台に立ってたりしてたんだけど、二年の六月に機動隊が入ってストライキになってからは、そっちの方に力点を移動させました。私は芸術系ということで政治青年ではなかったのですが、クラスでは勝手なことをやりましたね。革マルのセクトに出入りしてるやつとか、共産党系の組織に入っているやつとか、そういう活動家の連中がいろいろなことをやっていた。例えば、一年の終わりの二月ごろに佐世保にエンタープライズっていう航空母艦（\*3）が寄港することになった。で、それに反対するためにクラスから一人ずつ佐世保に送り込もうということになって、一人千円ずつカンパを集めたりだとか、三月には王子野戦病院（\*4）にかけつけたりだとか。そういうのに出かけないと、アンガージュ...参加してないってことで落ちこぼれちゃうわけですよ。皆一生懸命やってるからね。私は芝居が忙しくて全然行かなかつたんだけど。それに、つまらなかつたし。というのは、そういう運動は完全にセクトに仕切られてしまっているから彼等のいうとおりに行動しなくてはならなくて、学生の主体性なんてものは全くなかつたわけです。だから、うちのクラスでは、自分たちで行動しようってことを決議していたらしくってどこかからヘルメットを買ってきて、クラスカラーに塗って「今後は独自行動をする」とかなんとか宣言したりしてましたね。私は、舞台に立ったりしてたから参加してなかつたのだけけど、二年生の六月十七日の未明に安田講堂に機動隊が入ったことにショックを受けて、そのころから徐々にそっちの方に力点を動かしました。なぜショックなのか皆さんにはよく分からないと思うんだけど、大学側はそれまでずっと「私達は、警察とは何の関係もありません。学問の自由を守るために、学生たちが左翼活動に参加するのに反対しているのであって...」ということをお願いしていたわけです。それなのに機動隊を入れるなんて何事だ、ということで学生がだいぶ怒りましてね。翌日学

校に行ったら、分厚いパンフレットを渡されまして、闘争の歴史、なんてことを勉強していくわけですがけれども、読むだにおかしいわけですね。事実経過が。で、当時の自治会長が観光バスを四十台くらい借りていて、それに乗って本郷に行きまして、機動隊導入抗議集会に参加したりしましたね。

先生自身も、そういう大学側の対応に対して怒っていた...？

そりゃあ、大学側はけしからん、と思ってました。こういう馬鹿馬鹿しいことを見過ぎては...そりゃあないんじゃないのっていうのはありましたからね。基本的には怒っていた。でも、普通の...人間関係での怒りっていうのはワァーっときてなくなるものだけけどこういう怒りっていうのは持続しないといけないわけですから、それを怒りと呼んでいいのかどうかはまた難しいけれどね。

## 2 二十歳の誕生日

二十歳の誕生日はどのようにして過ごされましたか？

私の誕生日は十月の二十一日なのですが、二十歳のときはちょうど国際反戦デーの当日だった。昔は新宿駅を貨物船が通っていて、ベトナムに輸送するジェット燃料やなんかを運ぶ貨物列車がずうっと通っていたわけですね。で、当然新宿ターミナルを通るから、それを実力で阻止してベトナムの人民と連帯しようということを過激派が言うわけだ。それは全共闘とは直接関係が無かったのだけれども、そういうのにもいかなくちゃいけないということになって、それに参加したんです。当日、代々木公園どこかに集まって集結式を開いて、「これからゲリラ式に新宿駅にむかう」とか言ってどこをどう走ったか覚えていないけど、ごちゃごちゃくねくねと二十分ぐらい走ったら新宿のガードの所に出ていた。それで、「これから線路に入る」という指示が出て構内に入って「ホームを占拠したぞー」なんてやってたら、機動隊が来て挟み打ちになってしまった。で、私は新宿のマイ・シティというビルの東口にあるちっちゃな窓から入って逆方向に逃げたから助かったのだけれども私の二列後ろの人は捕まってしまった。その日僕はちょうど二十歳の誕生日だったから、ここで捕まったら、家裁送りでは済まないな、まずいなあとかと思ってましたけどね。

## 3 安田講堂陥落

一九六八年の一月十八、十九日の安田講堂陥落のときにはどうしてましたか？

その時は御茶ノ水にいました。本郷は完全にロックアウト状態で近づけなかった。近づけないけど何かしなくてはいけないということで、当時御茶ノ水にあった中央大学の広い中庭に集まって、そこから御茶ノ水の方に繰り出して...、そのちょっと先のあたりに向こうの防衛線があったから、そのあたりで追っかけごっこかなんかやっているという状態でしたね。

## 4 角材とヘルメット

運動のときに学生たちが持っている角材やヘルメットはどうやって集めるのですか？

ヘルメットは各クラスで自弁してました。自分の家に持って帰ることもありましたし、友達のうちにおいてあることもありました。で、角材というのは場所をとりますから幌をかけた二トントラックにたくさん積んであってそれがバツと着くようになっていた。それを駒場とか本郷のどこかに隠しておいて、持ってくる。角材といっても

三、六メートルの杉の棒を真ん中で少し角度をつけて二つに切るだけですからね。それから、軍手とタオルは自弁でした。

家にヘルメットを持って帰ったときにご両親は何か言いませんでしたか？

いや。ちょうど父親が病気で入院してましたし、母親は何もいわなかった。それでも一度、「おまえはそういうことをしていいと思っているのか。」って聞かれたから「いいと思っている。」って答えたら、それ以上は何も言いませんでした。

全共闘の運動を通して一番印象に残っているのはどんなことですか？

あれは何のときだったかなあ。たしか、誕生日の一、二週間前じゃなかったかと思うんだけど...。その時も、国際反戦デーのときと同じように、集まって新宿方面に行こうということになったんです。でも、阻止線があったりして、いろいろと回り道をしているうちに普通の市街地で、乱戦になってしまったんですね。そしたらよその大学かなんかの、初めてデモに来ましたっていう女の子がいて、白いヘルメットに赤い十字を描いて救護隊というのを勝手にこしらえてしまってたね。私は救護だから中立だ、みたいなつもりらしかったんだけど、機動隊はそんなこと全く頓着しないから追いかけてつかまってねえ。男女の見分けもつかないから、ぼこぼこに殴られて頭からかなり血を流したりしたので、その子を助けて医者に連れていったことがありましたね。

## 闘争の終了社会学者への道

### I 敗北

全共闘運動から離れたのはどういうきっかけからですか？

そりゃあ、全共闘がなくなってしまったから。主体的に、この運動は間違っているからやめようというのではなくて、なくなったからやめたという...そういう意味では受動的だといえるかもしれない。でも、やめるといってもきれいさっぱり運動から離れてしまうことはできなかった。というのは、一連の運動の中で、捕まってしまって小菅の拘置所かなんかにいる連中がいるわけでしょう。彼等のことはほっとけないから、弁護士費用を稼ぐために街頭でカンパをしたりしなくてはならない。裁判はずっと続きますからね。

じゃあ、間接的な形でその後もずっと関わっていたのですか？

まあ、それは義務みたいなものですから。私の友達なんかも捕まってしまって、執行猶予はついたけれども有罪でしたから、就職できないし。捕まるか捕まらないかはそれこそくじ引きみたいなもので、私はたまたま捕まらなかっただけですからね。そういう、有罪になってしまった友達をほっといて自分だけ抜けるといえるのは、そりゃあまずいんじゃないかなあ、という思いはありました。友情というか、義務ですかね。でも、義務じゃ運動はできないわけです。運動はもう駄目なわけですから、なぜ駄目なのかということをもっと別々に考えていかななくてはならなかった。

学生時代の、非常に多くの時間をかけた運動が負けてしまったのだと知ったときには、どんなお気持ちでしたか？

そりゃあ、あんまり愉快なものじゃあなかったですよ。私自身は、この運動の課題というのは左翼が成り立つか、マルクス主義は成り立つのか、というところにあると思っていました。で、最初はマルクス主義は成り立つけれども運動としては負けたんだというふうに思っていたんです。しかし、だんだんとマルクス主義に対するさまざまな疑問が浮かんできて...。マルクス主義は経済に対して否定的だけど実体として

の経済は資本主義だ、とかね。いろいろ考えていったんだけど、最終的に解決したのは森嶋通夫さんという経済学者の書いた『マルクス主義の経済学』っていう本を読んだときです。この本を読んで、マルクス主義は限界のある主張だっていうことを根本から納得できたんですね。でも、それを読んだのは七五、六年で、二七歳くらいときだった。二十歳のころの私は、やっぱり一応マルクス主義者だったわけですから、セクトには入っていなかったけれどもマルクス主義は正しいと思っていたんです。その立場からいろいろと行動していたわけですが、どうもなかなか現実とあわなくて、だんだん懐疑を覚えていって最終的にはマルクスの立場を間違っていると考えていった...というあたりは精神的にも苦しかったですよね。

## II 社会学者への道

全共闘の敗北を知って社会学者になろうと思われたのですか？

というか...。全共闘はもう終わりになってしまって、政治をやるわけにもいかないし、お芝居だってプロになるわけではないからね。そういうときに自分が飽きずに続けられて、そして人のためになるかもしれないのはやはり社会学じゃないのかなって思った。それには大学院に行くのが一番自分を鍛えられるし環境も整っているし、というふうに考えて進学しましたね。

## III 運動を振り返って

全共闘運動を通して得たものはありますか。

得たもの...。まあ、あえて得たものと言うならば、社会科学者としては非常に良い実験ができたということでしょうかね。ふだんとは違う環境条件に、人間が置かれたときにどういう行動をとるかは、社会学にとっては非常に重要なことなので、それは一つの成果だといえるでしょうね。

今の先生の考え方などに与えている影響はありますか。

運動が終わってみて私が一番思ったのは、大学の研究職とか研究というものは公的資源、公的財産だということだったんですね。だからすべての人に開かれていなくてはならなくて、そこには正義もあるはずなんだけれども、全共闘という視点からみると、そういうものはあんまりないみたいだ。でも、だからと言って、私は大学と関係を持たないよ、というふうに言えばそれで済むかというところではない。少なくとも今は、そのポストを占めるべきではない人々が占めているのではないか、というふうに思ったんです。今現在、当時とは立場が変わって、こうして大学の教員をやっているわけです。そうすると、学生からみれば教員の、アラ、というかいんちきな所ばかりよく見えるかもしれないけれども、教員からすれば必ずしも学生が正しいわけではなくて、批判すべき点もいろいろあるだろうし...ということがだんだんわかってきた。だから、私自身の気持ちは、教員と学生の間にある、というか...。生徒は生徒、教員は教員というふうに別れてはいるけれども、大学で追究されている、大学でやらなければならない本質的な課題はあるわけですから、私は大学がなくていいとは思っていない。むしろそういう本質的な課題については率直でありたいな、というふうに思っています。

## 二十歳へのメッセージ

学生時代にもっと議論をしてほしい。とは言っても、昔とは大学のあり方も変わって

しまいましたから難しいとは思いますが。学内寮がなくなって自宅通学なり、アパート通学なりが増えて学生間のコミュニティがなくなってしまったし、寮に泊まり込んで夜を徹して話し合ったりもできなくなりましたからね。でも、議論していないということは、デメリットなんてものではなくて、もうどうしようもないわけです。磨いていないダイヤモンドと同じです。磨いてなければダイヤモンドでもガラスでも一緒なんです。まずは時々、マスコミではないメディアから情報を手に入れて、自分の頭で考えてみて、そしてその結果をぶつけられる相手を探す。そういう志を持っている人は必ずいるはずですよ。自分が一人でいる間に仕込みをしておかないと、そういう人に会っても分かりません。ただ一人でいるということと、個であるということとはあんまり関係がない。ただ長い間一人でいるだけでは、個なんて全然持てません。自分を鍛えていくためには、手近な人間とぶつかるということがどうしても必要なんですよ。

\*1 フーコー (一九二六～) フランスの哲学者。主著に「知の考古学」など。

\*2 アルチュセール (一九一八～) フランスの哲学者。

\*3 佐世保エンタープライズ (一九六八年当時) 世界最大の原子力空母。北ベトナム攻撃の途中で鹿児島に寄港した。野党・労働団体・学生は一斉に反発し、佐世保に乗り込んで抗議集会やデモを繰り返した。

\*4 王子野戦病院 一九六八年三月に開設された米陸軍キャンプ。

---

[Back to "Hatachi" Main Page](#)  
or [Takashi Tachibana Main Page](#)

---

---

[1]

松下政経塾と「中田人脈」の研究(補論)03-7-24

<http://satou-labo.sci.yokohama-cu.ac.jp/030724taira.htm> より抜粋

・・・昨年NHKは「戦後50年そのとき日本は」という連続の特集を組んでいる。その中に「東大全共闘・・・26年後の証言」というのがあった。私は残念ながら見ることはできなかったが、最近本になって出版され、読むことができた。

東大全共闘、民青のメンバーや、大学側、警察側の関係者の証言を集めて、東大闘争を再現し、当事者の現在の眼から見た姿を明らかにしようとしたようだ。

橋爪大三郎、今井澄(社会党参議院議員)、最首悟、三浦聡雄(当時民青、東大民主化行動委員会議長、後に共産党を離党)、町村信孝(自民党衆議院議員)ほか20名以上が実名で登場し、闘争の経過を振り返りながら、現在から見た闘争の意味を語っている。

医学部の不当な処分問題から始まり、全学スト、機動隊導入、新左翼諸派、民青の介入、安田講堂封鎖、内ゲバ、封鎖解除、入試中止、と続く経過を追いながら証言で綴られている。

私もこの番組を見た記憶はないが、町村氏と並んで、橋爪大三郎・市大「あり方懇」座長も登場している。当時は東大文学部の若き学生だった橋爪氏は、年長の今井・最首両氏という全共闘の



最高指導者のように「安田砦」に立て籠り、機動隊に逮捕されたわけではない。しかし、橋爪氏自身の「全共闘運動史」を、1996～97年頃に東大駒場で非常勤講師を務めた評論家の立花隆氏のゼミに参加した30年も後輩の学生たちの「素朴」なインタビューに語っている記録は大変興味ぶかい。以下のリンク先でぜひご参照いただきたい。

<http://tron.um.u-tokyo.ac.jp/tachibana/hatachi/hasizume.html>

<http://www5.big.or.jp/~s-yabuki/doc03/hashizume.pdf>

なるほど、60年安保の全学連にも70年安保の全共闘の面々にも多々いる、後には「体制派」に転向した1人として、東大闘争当時は「敵味方」に分かれた佐藤謙一郎代議士とも「中田人脈」を通じて仲間となった橋爪教授は、昔の「東大解体」の主張とは似ても似つかないのだろうが、横浜市大の「全国で最もユニークで先進的な大学改革」を標榜して「大学解体」を図るモチーフは全共闘運動にあったのか！と私は妙に納得した次第である。・・・